

十勝和牛のブランド化の取組

長澤真史（東京農業大学生物産業学部）

「十勝和牛」は、十勝農協連に事務局をおく「十勝和牛振興協議会」に参加する黒毛和種生産農家によって生産されている。この協議会は十勝農協連傘下の18農協、総勢546戸で構成されているが、飼養戸数の多い農協をみれば、池田町56戸（黒毛和種頭数2,350頭）、足寄町55戸（同4,624頭）、音更町54戸（同1,949頭）、大樹町50戸（同2,913頭）、本別町50戸（同2,045頭）などとなっており、肥育農家は74戸である。

また、肉牛生産は黒毛和種が33,901頭、この他に酪農王国・十勝とも称せられるように酪農の盛んであることを反映してホル肉用牛が84,758頭に達し、F1の44,994頭なども含めた肉専用種総飼養頭数は165,346頭に及び、北海道のみならず全国有数の肉用牛生産地帯を形成している（数字は平成21年12月末現在、十勝農協連『十勝畜産統計』より）。

なお、肥育牛は平成20年で4,336頭であり、そのうち「十勝和牛」として出荷されるのは1,000頭程度である。

「十勝和牛」のブランドの定義は、「十勝和牛振興協議会が認めた生産者が肥育・出荷した和牛」とされ、現在のところ商標登録はしていないが、平成14年12月16日に「十勝和牛」のブランドを創設している。飼養管理方法に関しては、出荷月齢・出荷体重は制限が無く、給与飼料基準として良質粗飼料と配合飼料をあげて、「北海道内で生産され、十勝平野の雄大な自然環境の中で良質粗飼料を十分に与えられて肥育されて上質の肉牛」を特徴として掲げている。そしてと畜処理・加工出荷は(株)北海道畜産公社道東事業所十勝工場が担っている。

十勝地域における肉牛肥育は、酪農王国を基盤に酪農家が生産した乳雄子牛を素牛として肥育した乳雄牛が過半を占めている。最近の統計でも士幌町、上士幌町などは大規模な乳雄肥育経営が存在する。そのなかで和牛を主体とした肥育農家数を町村別に見れば、音更町（22戸）、大樹町（38戸）、池田町（36戸）、幕別町（26戸）、足寄町（44戸）当たりに広がっている。十勝地域における和牛飼養は昭和20～30年代に始まるが、拡大局面は昭和50年代以降のことである。現在もそうであるが、基本的には道内外への肥育素牛供給基地的性格を色濃く持っている。したがって最終商品の牛肉生産を担う肥育事業自体の歴史は比較的浅く、例えば更別村だが、関係機関のバックアップのもとで島根県より繁殖牛55頭を導入して和牛産地づくりがスタートしたのは平成2年のことである。十勝地域といっても市町村毎にみれば和牛導入時期も異なり、産地形成のあり方も様々であるが、それらを束ねて和牛振興のリードしてきたのが十勝農協連であり、そのもとでの十勝和牛振興協議会であった。

十勝和牛の流通と販売ルートについては、十勝地域の各JAからホクレン経由で北海道畜産公社道東事業所十勝工場においてと畜解体され、併設枝肉市場でセリにかけられる。

十勝和牛というブランドでは年間 1,000 頭程度であり、地元の卸売業である F 産業が多くをセリ落とし、委託加工を行って丸大ミート経由で北海道内ではマックスバリューに販売される。これ以外に関西方面のスーパーやデパートにも販売されている。

「十勝和牛」の場合、十勝農協連の下、和牛飼養農家で組織された十勝和牛振興協議会を中心とし、多くの市町村にまたがる広域的な和牛産地で生産されている。和牛の場合、大量のロット取引が可能な乳雄牛肉とは異なって個体差が大きく、大量の牛肉需要に容易に対応することは幾多の制約もある。特に市場評価についても現行のセリ取引が依然として適合的であり、シンプルな販売ルートの形成には困難が付きまとう。しかも血統問題という和牛独特の世界の中で、後発産地としてブランド化した和牛産地づくりも厳しいことは言うまでもない。

しかし昭和 50 年後半以降、本格化する十勝地域の和牛生産は、地道な改良を重ねながら、平成 14 年に「十勝和牛」としての銘柄を創設するに至っている。これにはホクレン帯広支所畜産販売課と十勝農協などの関係団体の果たす役割が決定的であった。「十勝和牛」ブランドはそもそも歴史は 10 年にも満たないほど浅いが、ホクレン帯広支所畜産販売課は、販路確保など消流対策を一手に引き受け、販売店ではシールやラベルを貼ったり、パネルやポスターを設置するなど P R 活動も積極的に行っている。十勝農協連は、十勝和牛振興協議会の事務局として、「十勝和牛改良方針」を掲げて、繁殖牛基盤の整備、家畜改良事業団と提携して育種価利用による枝肉成績予測値を活用するなど、繁殖～肥育全般にわたるきめ細かい和牛技術支援、和牛飼養農家の組織化による和牛産地体制の確立に向け、非常に積極的に取り組んできている。

「十勝和牛」は後発である故に、種々の課題をかかえている。個体差も大きく、それだけ均一な生産マニュアルづくりは難しい。現在のところホクレンくみあい飼料を使っているが、飼料を統一することはしていない。十勝という地域の特性、農家経済の状況を十分に踏まえた黒毛和種繁殖基礎雌牛群造成に力を入れ、生産者に選択の幅を広げつつ、経済的メリットをもたらす方向で生産拡大～和牛飼養農家の裾野の拡大を図ることが当面する重要課題であろう。そのことによって牛肉供給の安定性、価格水準の妥当性を確保し、さらには安全性の高さ、生産履歴などの情報開示を積極的に推し進めていくことである。

牛肉としての量と質を如何に高めるかということであり、今後肥育も含めた飼養管理マニュアルの作成も必要であろう。低コスト生産による低価格販売による需要への対応がポイントとなるが、たんに低価格での販売に目を奪われることなく、逆に低コスト生産が可能な環境であるだけに、その強みをどのように発揮するか、今後の販売対策の強化が求められる。